

今日の福音書は、イエス様が復活された日の夕方、ふたりの弟子が、エルサレムから西へ11キロほど行った所にある、エマオという町まで歩いているところから始まります。二人が話しながら旅をしていると、ひとりの人が話に加わり、やがて、宿で食卓につくと、加わったひとりの人がパンを裂いている姿を見て、このふたりの弟子は、その人がイエス様だとわかった、という不思議な話です。

先週の福音書は、弟子たちが集まっている所へ、突如イエス様が現れて、みんなが驚いた、という劇的なイエス様の登場の仕方でしたが、今日の福音書では、道で言葉を交わしたり、一緒に食卓に着くなどの出来事を通して、時間をかけてイエス様の存在を理解する、という形です。そして、パンを裂く姿でわかるのですが、そのイエス様は、すぐに消えます。しかし、その後で、二人の弟子は、この一連のイエス様との出会いをまとめるように、『道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』という風に、しみじみと出会いの体験を振り返っているのです。

今日登場する弟子クレオパはどんな人物だったのでしょうか。

聖書の中には、ここ以外に、クレオパは登場しません。ただ、クレオパともうひとりの弟子が、イエス様と話している内容から考えて、彼らは、熱心に聖書を読み、(この場合の聖書とは旧約聖書のことですが)、そして、自分たちユダヤ民族を、ローマ帝国の圧力から解放してくれる救い主メシアを待ち望んでいた人だったのでしょうか。そして、イエス様こそ、そのメシアだと信じていたのです。ところが、イエス様は二日前に十字架に架けられて殺されました。しかし、日曜日の朝、イエス様の墓が空っぽになっていて、それを発見した仲間たちは、「イエスは生きておられる」と言うのです。でもクレオパたちには、それが何のことなのかわからず、失意のまま、エマオへ歩いています。おそらくエマオがクレオパたちの出身地だったのでしょうか。彼らは、日の昇る東の方にあるエルサレムへ、イエス様の勝利を期待して登ったのに、今は失望して、日の沈む、自分の町エマオへ帰っているのです。

そんなクレオパに向かって、イエス様は、厳しいことを言われます。

『ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。』とされました。

『そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。』と書かれています。

クレオパたちは、後から考えると、この時心が燃える体験をしたのですが、どんな話だったのでしょうか。

『モーセとすべての預言者から始めて、』とは、ユダヤ人たちが聖書の中心と考えてたモーセ五書(創世記から申命記)、そしてそれに続く歴史の書物をさすのです。イエス様が生まれる何百年も前に書かれた書物。それには、苦しみを受けてから栄光に入られる、イエス様に関することが預言されている、というわけです。しかし、クレオパたちは、そんな読み方をしたことがありませんでした。

イエス様が説明されたのは、こんな話だったのではないのでしょうか。

例えば、アダムとエバが罪を犯した後、神様は彼らに皮の衣を作って着せました。裸の彼らが神様の前に立てるように、動物を殺して、その皮で服を作ってくださいだったのでしょ。動物が犠牲になっています。人間を救うために、犠牲になった動物は、鹿だったのか、羊だったのかわかりませんが、この犠牲はイエス様の十字架を暗示しているとは思いませんか。

パウロは、「主イエス・キリストを身にまといなさい。」（ローマ 13：14）と言っています。

また、モーセは、エジプトを出ると、荒れ野を三日旅して、マラという泉に着きますが、苦くて飲むことができませんでした。そこでその泉に木を投げ込んだら飲める水になった、ということがありました。また、ずっと旅を続ける間に、人々が食べ物の中で不平を言うと、神様は炎の蛇を送り、その蛇にかまれた人々は死んでしまいました。そこで、モーセは神様の指示に従って、青銅の蛇を作り、旗竿の先に掲げました。そして蛇にかまれた人も、その青銅を仰ぐと、命を得たのです。

これらの木とか、青銅の蛇を掲げた旗竿は、人類の罪を贖うイエス様の十字架を指しているのではないのでしょうか。

イエス様が十字架の苦難を受けて死に、その後復活されることは、旧約聖書の全体を通して、語られていることではないか。その聖書の預言が、今実現したんだ。ということです。

今まで、旧約聖書は、子どもの頃からよく読んでいたクレオパたちも、それがイエス様のことを預言している、ということに、やっと気付きはじめました。

この説明にクレオパたちは興味を抱き、まだ先へ行こうとされているイエス様を引き止めます。そして、一緒に食事の席に着いた時、イエス様がパンを裂く姿を見て、それがイエスだとわかった、という、不思議な話が展開されます。

3日前にイエス様が最後の晩餐でされた、聖餐式に、この弟子たちも参加していたのでしょうか？あるいは、ガリラヤで行われた、5000人を5つのパンと2匹の魚で養った、パンの増加の奇跡を思い出したのでしょうか？

クレオパたちは、今イエス様と共に食卓にあるとき、イエス様の復活、神様が共にいてくださることを確信したのです。

このエマオでのイエス様の出現は、実はこの福音書を書いたルカの創作した作り話であろう、という説が有力です。

というのは、この福音書が書かれたのは、イエス様が十字架に架けられてから50年以上過ぎた頃だと言われているからです。もう、イエス様に直接会って話を聞いた弟子たちの多くは、死んでいます。そして、イエス様はなかなか天から帰って来てくれない。ローマ帝国のクリスチャン迫害は強まるばかり。

そんな時代に、イエス様が復活したことをどのように説明したらいいのか。ルカはクリスチャンが毎週日曜日に集まり、聖書を読んで、パンを裂く、聖餐式。この聖餐式が、復活したイエス様を一番良く表しているのではないかとクレオパたちの話を通して言いたかったのです。

何の気なしに、ただ昔話と思って読んでいた旧約聖書や、人々の日常生活の話。しかし、そこにイエス様が暗示されている、と気づく時、わたしたちは興味をそそられ、心は燃えることがあります。

その時、私たちはイエス様に出会っているんだ、とルカによる福音書の著者は、弟子クレオパの口を通して告白しているのです。

私は、2週前、イースターの礼拝で、イエス様の復活というのは、死んだイエス様が以前のように息を吹き返すことではない。

もうイエス様は、イスラエルという限られた空間とか、2000年前の限られた時間に束縛されることなく、いつでも、どこでも現れることができる、つまり聖霊に変わったのだ、と言いました。

そして、先週も宮崎の礼拝でしたが、復活した日の夕方、イエス様が弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と言われたことで、実はヨハネではもう聖霊降臨が起こっていると説明しました。

というのは、使徒言行録やパウロの手紙にも、聖霊と同じ意味で「キリストの霊」とか「イエスの霊」という言葉が登場してくるからです。聖霊は、イエス様が復活した姿なんだと考えてもいいのです。

宮崎で聖餐式をする時、私は聖餐式のパンを大きなひとつのパンにしています。それは私たちの教会が共同体としてひとつのキリストの体である、ということを表していますが、それだけでなく、このパンを裂く私たちの中に、確かにイエス様がおられる、ということ、信じるためです。この礼拝を通して主が共におられることを確信し、燃える心で今週も歩みたいと思います。